

ふりかえり会議（最終）コーディネーター意見書

事業名：若年無業者を生まないための高校学齢の不登校生、高校中途退学者、無就学者支援ネットワーク事業

事業パートナー：NPO法人 チャレンジスクール三重

行政担当課（室）：三重県教育委員会事務局高校教育室、三重県こころの健康センター、三重県生活部NPO室

コーディネーター氏名（所属）：吉島隆子（みえ市民活動ボランティアセンター）

サブコーディネーター氏名（所属）：安村富子（みえ市民活動ボランティアセンター）

ふりかえり会議開催年月日：平成 19 年 3 月 19 日（月）9：30～11：30

1. 協働の状況について

（協働の妥当性・パートナー選択・資源配分と責任分担・意思決定のしくみと対等性の視点から）

今回の事業は、名称は事業となっているものの、「事業化できるかどうかを協議・検討する」という内容であったため、事業化以前の話し合いに主眼が置かれている。

NPO側からの協働事業提案により取り上げられた「若年無業者を生まないための高校学齢の不登校生、高校中途退学者、無就学者支援ネットワーク事業」ということで、課題そのものの重要性については行政側当事者である県教育委員会も認識しているものの、高校学齢の不登校生という義務教育外でのことであり、県教育委員会の所管業務の守備範囲を超えた課題として制度や組織の狭間にあり、現況で直ちに取り組める状況にないことが、そもそもの根底にある。そのような状況下において対応に苦慮されている中で、地域の教育現場への顔つなぎのための労をとっていただいたことは特筆に価する。

一方、NPO側は自らが当初、思い描いていた提案内容は意欲的ではあるものの広範で大きく、現行制度下での実現には遠く及ばなかったものの、話し合いを重ねる中で関係機関をはじめ地域の教育現場との顔つなぎや新たな展開のきっかけが得られた。限られた期間ではあったが、できたこととできなかったこと、問題点の整理など実際に関係部署と話し合った結果、見出せたことは大きい。

今回、協働事業の調整役としてかかわったNPO室にとって協働事業推進への使命感であろうか、肩に力が入っており、成果を急ぐあまり的確な進行と状況把握ができていなかった感がある。そもそも協働事業化できるかどうかという基本的な協議の場であることの意識が希薄であったと思われる。また、今回のように関係者相互の意識や思いの差が大きく、隔たりのある場合、調整役としての力量不足は否めない。その分、サポート委員のバックアップが大きかったと思われる。

パートナーの選択に当たり、NPO室が教育委員会組織の詳しい所管内容を十分に把握しないまま担当課を短時日のうちに決めたことが発端となり、どこの課が受けて対応可能かどうかという検討・見極めがなされないままに進められたところにも課題が見受けられる。

なお、今回の協働事業提案についてはNPO側、教育委員会側それぞれの把握するニーズの差は大きく、NPOの意気込みからすれば制度の壁は厚かったということになるが、制度の狭間で苦しむ高校学齢の子どもたちの存在を何とか救いたいというNPOの熱意と先駆的取り組みへの足がかりとし

て、関係者間の意識や課題共有の大切さも今回の検討会議を通じて得られた意義と考える。ただ、協働事業とすることに無理がなかったのかどうか検証することが必要との意見も出されている。

2. 実施事業の状況について

(戦略性(計画性)・事業の継続性と柔軟性・情報公開の視点から)

「事業化できるかどうかを協議・検討する」という内容であったため事業化はできておらず、ふりかえりのためのチェックリストも設問に無理があったり、内容的にそぐわない部分も多く、評価者がそれぞれ異なった観点から答えているので、ふりかえり会議の場でそれぞれの思いや考え方を述べた。

3. 事業実施体制について

(資源配分と責任分担・意思決定のしくみと対等性・事業の継続性と柔軟性・情報公開の視点から)

上記項目と同じく「事業化できるかどうかを協議・検討する」という内容であったため事業化はできておらず、ふりかえりのためのチェックリストも設問に無理があったり、内容的にそぐわない部分も多く、評価者がそれぞれ異なった観点から答えているので、ふりかえり会議の場でそれぞれの思いや考え方を述べた。

現在の社会では制度の狭間にあって行政の守備範囲の違う問題なので、具体的な実施体制をとる困難さがあったが、NPOにとって地域の教育現場との顔つなぎができ、新たな展開の端緒となったのは今後への希望につながる。ただ、NPOの信頼性が今後の課題として提起されている。

4. 行政担当課(室)からのコメント

三重県教育委員会事務局高校教育室	室長	山川政美	記入者	藤田曜久
<p>【ふりかえり会議をやって気づいた点、今後の展開等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事業化はできなかったが、県立高等学校の教職員に対して、不登校生徒を支援するNPOの活動についての理解が得られる機会となった点は有意義であった。 ・ NPOが行っている活動は、行政ではできなかつたり、不十分であったりする部分があるため、NPOとの協働事業を考える際に主管室はどこかという点について考えさせられた。 ・ 例えば不登校生徒に対して、あるNPOはしばらく休んだ方がいいので、そのための居場所を提供することが重要と考え、別のNPOは学校へ戻すことが重要と考えるなど、同じ現象であってもNPOによっては対応や理解が全く異なっているという実態がよくわかった。また、このことから、どのような行政支援が必要なのか、あるいは不必要なのかという点について考えさせられた。 				

三重県こころの健康センター	課長	安保明子	記入者	岩樋祥子
<p>【ふりかえり会議をやって気づいた点、今後の展開等】</p> <p>ひきこもり状態の若者を含む若年無業者への支援は、個別性が高く、ひとつの機関では難しい面も多いため、多くの機関が連携しながら進めていく必要があります。そうした点からみても、今回NPOや行政機関などが集まり各々の役割や可能性を検討する機会が持てたことや顔つなぎができたことは、とても有意義だったのではないかと感じています。機関どうしの連携の基盤はできたので、今後はより具体的に事例の紹介や情報提供などしていけるのではないかと思います。</p>				

三重県生活部NPO室	室長	若林千枝子	記入者	堀木俊哉
<p>【ふりかえり会議をやって気づいた点、今後の展開等】</p> <p>協働事業を構築するうえで必要な問題の把握はできていても、それぞれの立場と制度上の制約を越えて、問題意識を共有したかたちでの協働事業構築に至らなかったのは、問題自体の難しさもあり残念に感じました。NPOから示された新しい視点から問題に取り組めたという面においては、意見交換の中で出てきたさまざまなアイデアや、関係機関の連携を今後に生かしていけるよう問題意識を持ち続けていきたいと考えています。</p>				

5. 事業パートナーからのコメント

(特非) チャレンジスクール三重	代表	玉村典久	記入者	玉村典久
<p>【ふりかえり会議をやって気づいた点、今後の展開等】</p> <p>関係諸機関のみなさまには、1年間にわたり、守備範囲を越えた課題についての私どもの提案にお付き合いいただいたことを感謝いたします。これまで学校の問題とされてきたこの課題について、教育行政とNPOが協働できる可能性を探ることができた点でこの協働事業提案は意義のあるものになったと思います。一方でこの問題は高校教育だけの問題ではなく、学校教育・生涯教育全体として取り組んでいく内容なのかもしれません。広い見地に立ってこの問題について検討していく場を持ち続けていきたいと考えます。</p>				